

部 長	長谷川裕城
研究主任	大槻 直矢
部 員 数	9名

1 研究主題

子どもたちの関わり合いを重視し、基礎基本の定着を図った書の指導

2 はじめに

基礎基本の定着のために書の授業の習慣化、相互評価の定着など、年間を通して書の学びに向かえるように、その手立てについて授業研究を行った。小牧の「学び合い」の体系を書の授業にも取り入れようと「風車の隊形」による授業展開なども取り入れてきた。また、前年度から引き継ぎ、タブレットを活用した相互評価の方法や、本時のねらいの共有など、新たな手立てについても実践、研究を行った。

3 研究経過

- 4月 研究主題・研究組織の決定・年間計画
- 5月 実践計画
- 6月 実践交流1
- 7月 講習会
- 9月 実践交流2
- 10月 実践交流3
- 11月 実践交流4
- 1月 実践交流5
- 2月 本年度のまとめ

4 研究の概要

担当学年が多岐にわたる部員が実践を行う中で、共通して取り入れる手立てを決めて取り組みを行った。

(1) 基礎基本の習熟

基礎基本の定着のために継続的な課題設定や、生徒が自分の作品とお手本の違いを見比べ振り返るためのプリント利用など、見比べながらの技術習得に重きを置いた。また、課題に取り組む前に本時の目標を提示するだけでなく子ども一人ひとりに目標を立てさせることで習得する技術を明確にし、取り組むようにしてみた。これらの課題設定や相互評価の時間を取り入れることで、自分の課題を発見し、積極的に反復練習に取り組む姿が見られた。

(2) 相互評価

相互批評を通して、自分では気づくことができなかった手本との違いや自分の字の良さに気づくことができた。そこで、グループ活動から個に戻し、実際に書く前にどこの部分を意識して書くのかを、お手本に記入させた。また、タブレットを使って作品を写真に撮り、記録を残すことで、周りの生徒との作品の共有や、最初と最後の作品の比較に活かすことができた。

(3) 運筆指導について

小学校では水書を使うことで、筆の弾力性を活かした運筆を学習したり、筆の線の太さを力加減で表現したりするなど、筆の特性を理解するのに役立てることができた。また、水書では準備の時間や、汚れを気にせずに取り組める利点がある。

(4) 書の授業の多様化

書写の時間が「書の授業」の大半を占めるが、筆ペンを使っての短歌作成を行ったり、筆絵に添える文字を書いたりするなど筆そのものに触れる時間を増やしていく。また、書の教科書にあるような、書道の文化に学ぶような授業も積極的に取り入れていく必要がある。

(5) 全体を通して

今回の研究会では、基本技術の習得のために生徒が自分で課題をもち取り組める姿勢の育成について教員で考えることが多かった。作品を作ることも大切だが、お手本に近づけるためには自分で何が必要なのか考えたり、友達と改善すべき点を挙げたり、褒め合うことも「学び合い」の利用につながるのではないかな。

5 今後の課題

書写の技術習得まで反復練習が必要になるが、時間の関係で満足いく習得までいかに課題が先に進んでいってしまうという問題点があげられる。その結果、上手に書けないという気持ちが強くなり、書の授業を苦手とする生徒も少なくない。今回の実践を進める中で苦手意識よりも、生徒に達成感をいかに味合わせ、意欲をもたせるかということに取り組んだ。今後も生徒が書に魅力を感じることができる授業を模索していかなければならない。また、書写や硬筆の授業で学んだことが普段の「書く」ということに活かされるような指導の必要性についても今後の課題としてあげておきたい。